

食・農・環境の未来を「ゆうきの一步」から 有機農業宣言 東京集会 ～みんなで広げる有機農業～

6月29日にサンケイプラザで開催した、有機農業宣言 東京集会「食・農・環境の未来をゆうきの一步から」のシンポジウムと分科会の報告をお届けします。

当日は雨となりましたが、350名と多くのご参加をいただき、盛況のうちに終了しました。

シンポジウム「有機農業の明日を語る」

●パネリスト

金子美登さん(NPO 法人全国有機農業推進協議会代表)

福田英明さん(農林水産省環境保全型農業対策室長)

西村和雄さん(NPO 法人有機農業技術会議代表)

田下三枝子さん(有機農業生産者 埼玉県小川町)

井村辰二郎さん(有機農業生産者 金沢大地代表)

●ゲストコメンテーター／中地高子さん

(モデル・ダーチャサポーター)

●コーディネーター／中島紀一さん(茨城大学農学部長・

日本有機農業学会会長・全国有機農業推進委員会会長)

第1部 農家が語る有機農業

～これまでとこれから～

金子 有機農業に取り組み始めたのは1971年。おいしくて安心できるものを作ればきっと誰かが支えてくれると思ってはじめた。今から振り返ると3つの思い出がある。

1971年3月に農業者大学校を卒業して村に帰ったが、有機農業の「ゆ」の字も言えない雰囲気だった。農業者はいいものを作ると理解してくれるが、それまでが大変だった。

2つめの思い出は空中散布。有機農業をするには水田の空中散布をやめてもらわなければならない。止めてもらうまで約13年かかった。農協と役所に頼んだら、農家同士で話すように言われて一晩かけて話し合い、「美登ちゃんがあんだけ頑張ってるから一回休んでみるべいや」ということで、空中散布中止が実現した。病害虫が多発すると言われたが、結果的には病害虫は出ず、それからは村の人も農薬を使う量を少なくした。子どもたちは毎朝、空中散布の農薬を浴びながら通学していたから、お母さんたちが一番喜んでくれた。

3つめは1993年の冷害のとき。米の作況指数は70%で、私も3割米の収穫が減った。稲穂が枯れるのは悲しい。消費者10軒と提携していたが、足り

ない米の代わりに小麦・じゃがいも・さつまいもをたくさん作付けたので、私の抱えている消費者はびくともしなかった。有機農業での自給が完成できたと感じた思い出。

田下 83年に夫の隆一が金子さんのところで1年間研修した後、小川町で畑を借りた。24年間有機農業をして、今年4月、風の丘ファームという名で法人化、現在社員4人、研修生4人で取り組んでいる。自分たちは金子さんの14～15年後に就農、その後何人か優秀な農業者が就農して、小川町の仲間は今26軒。仲間が増えることは可能性も増えること。有機農産物で生活が商売として成り立つよう有機販売部を立ち上げ、毎年少しずつ伸びている。今年から国のモデルタウン事業として取り組むことで、行政や農協、それ以外の方々も一緒に取り組める環境ができた。これまでのように手弁当で生活を削ることなく、安心してやっていかれるかなと思っている。理解者は少しずつ増え、確かな手ごたえになって返って来ている。小麦や米などを農協に出すと、お金になって口座に振り込まれてよかった、で終わりだが、自分たちがやってきた有機農業はそこに人が関わってくれ消費者の発見と感動がまた自分の所に返って来る。この仕事のすばらしさを噛みしめている。

私達も金子さんのように後に続く人たちを応援したいと思い、研修生を毎年3～4人ずつ受け入れるようにしている。しかし、この社会で生活していくにはお金にならないと続かない。先日教えてみたら、やめずにがんばっている研修生が圧倒的に多くてホッとした。一昨年からは、1年研修生として過ごした後、2～3年目を社員として過ごしながら少しずつ自分の畑を作ってうちの販売ルートで販売していく、という方法もとれるようにした。

有機農業第Ⅱ世紀にあたり、有機農業に取り組みたいと思う人たちが農業に就くことができるシステム作りをしていきたいと思っている。

井村 金沢近郊の河北潟干拓地と能登輪島市の門前で、畑 135ha（二毛作なので作付総面積は240ha）水田で20ha、大規模土地利用型で米・大豆・小麦を作る有機穀物農家。脱サラして家業の農業を始めたのは1997年、31歳のとき。バブルが弾けた後、農業がどんなものか改めて見たとき、生活していく上でつじつまがあって本当に豊かな産業だと感じた。相談した知人に、「1年1作しかできないのだから急げ」と言われてすぐに就農した。それからまだ11回しか作っていないが、私なりの農業として、1000年先に残せるような土作り、1000年先に営みとして残っていくような経営体を作ろうと考えた。



井村辰二郎さん

私の使命は3つ。①1000年後も私たちが預かっている農地で農業が続けられる ②安全な穀物を安定的に供給する ③農村と都会を農産物を通じて結びつける 有機農業は付加価値をつけて高く売るのが目的ではなく、農業を続けるための手段である。1000年後まで続く農業とは、化学肥料を多投して1年単位で反収を追いかけ、生態系に負荷を与えて除草剤をまき、土地から収奪していく農業ではないだろう。そう考えると有機農業はとても理にかなない可能性のある農業だと思う。

ただ、実際に無農薬に変換するのは大変だった。父親とは毎日喧嘩、私の代になったとき「好きなことをやれ」と言われてやったら、大豆畑は草だらけ。麦類は土作りがしっかりできていないので豊かに実らない。それでも、ひたすら信念を持って続けてきて、少しずつ光が見えてきたかなという状況。

29歳で結婚して5年間子供ができなかったが、有機で就農して自分の大豆で豆腐を作り始めて二人で豆腐をたくさん食べるようになったら、ひょっこり子どもができたのもうれしかったことだ。

中地 皆様のお話をうかがって有機農業がここまでくるまでのご苦勞を改めて実感した。消費者の立場からすれば、安心して安全なもの食べたいというのは共通の思い。もっと広がってくれたら

第2部 いま有機農業を進める意味

中島 3人の農業者と中地さんのお話を受けて、いよいよ応援団の方々の話を聞きたい。最初に国の立場から有機農業推進施策を進めている福田さんから。

福田 去年の4月に環境保全有機農業対策室に配置替えになり、皆さんを支援する立場になった。私も新潟の水田農家の息子なのでわかるが、有機農業は労働時間がかかる。消費者がその分のコストを上乗せして買ってくれるのだろうか、そういう農業を本当に自分が進めていいのだろうかと不安だった。就任した翌週に金子さんの畑にうかがい、すばらしい環境の中で農業を行っていること、自分が思っていた以上に工夫して労働時間を軽減していること、そしてそれを支える消費者の方々が良いものを再生産可能な価格で計画的に買ってくださっていることも知った。

安全安心な環境を次世代に引き継いでいくことは農林省の使命だと思っているが、有機農業がうまくできれば、まさに命を支える食と安心して暮らせる環境を次世代の子供たちに伝えることができるのではないかと強く感じた。その上で国の施策をどうするか考えた。

有機 JAS の数量は 0.17% しかない。国からみれば 0.17% の人のために税金を使うということは評価されない。財務省は「0.17% の人が評価してくれるのだったら 0.17% の人が高く買う仕組みをつくればいいじゃないか」という考えだ。

有機農業推進法に書いてある環境負荷の低減という面で、負荷を下げるのは事業者の責務であって国の政策は支援の対象外。

推進法に書かれた自然循環機能の増進、これがキーワードとなった。有機農業はまさに土作りの基本である。昨年8月頃から検討会を開き、土作りにどういう効果があるのかを化学的に検証した。検討会の中で、一番大きかったのは地球温暖化の問題。温暖化防止対策に役立つのは、たぶん土作り



福田英明さん

るが、土壌に入れることによって半分以上が残る。土壌に半分以上残ってそれが化学的には腐植となり、長いものでは千年、二千年残っていく。そうやって土壌にためていくことが、地球温暖化の防止対策に非常に有効だということがある。土作りには堆肥を入れる以外にも、不耕起栽培、緑肥を入れる、多毛作をするといったことがある。これらは有機農業の方々の基本技術として励行していることだ。

そのほかにも有害物質を浄化して、環境を保全してくれるということがある。こうした内容について広く国民の方々に伝えていきたいし、そういう事に取り組んでいる方々も支援すべき。有機農業の基本技術を普及させていくとともに、それが地球環境の改善につながるという事を国民の方々に理解していただいて、輪を広げていきたい。

中島 世の中で有機農業は、「つくる人と食べる人が相互にいい関係がある。それでいいじゃないか」という言われ方をよくしている。それでもなお有機農業に応援の手を広げていく理由をどこに求めるのかということは、国の立場からすると相当しっかり考えなければいけない。いい事はいい事だ、というだけでは済まないということで、立派な理論構築をしていただいたと思う。今の国のいろいろな政策からすると、環境に資する点が農業の社会的利点として打ち出せることであるというお話だった。有機農業には、人を育てるとか地域をよくするという面もあり、国の宝としていろいろな側面から広がっていく可能性があると思う。有機農業第II世紀には、こうしたことを幅広く語り合っていければと思う。

西村 私は40年間有機農業をずっと見てきて、時代は変わってきたと思う。死ぬ前にこう言い残して溜飲を下げたいと思っていることが、ひとつだけある。それは、「まだ農薬みたいな、古くさいしょうもないものをかけてるのか」ということ。そう言える時代になっていけばいいと願っている。

肥料を大量に使えない時代がすでに来ている。少ない資源で国民の食料を確保するような時代を我々は迎えなければならない。少ない資源で土を再生産して生かしていく農業という部分に力点において、有機農業の技術を進めていきたいと思っている。そういう点で一番大事なのが有機農業40

年間で先人の残した知恵と知識と技術。しっかりと根付いた第二世代、次の第三世代の方たちにしっかりと有機農業技術を伝えねば。

もうひとつの夢は有機の村作り。化学物質過敏症や重症のアトピーの人たちが、安心して住めるような村を作って社会復帰させたい。生きている作物、命をつなぐ糧を私たちが作るべきだと思う。



西村和雄さん

第3部 有機農業第II世紀への夢と課題

中島 福田さんからいま有機農業を公共的に推進していく根拠はどこにおくべきなのかということで環境の話が出された。ここに国富を築くべきであり、国富を築くような営みには大いに応援をしていきたいというようなお話だったが、国富はここにもあるという話はたくさんあると思う。西村さんからは、どこに有機農業の価値をおくのかという話があったが。

金子 これからは農家ではなく農業の後継者を育てなければと考え、30年前から毎年1人、ここ5~6年は7~8人トータルでは100人くらいの研修生を送り出している。ほぼ全身アトピーの青年が研修に来たが、農場で採れたものを規則正しく三度三度食べたら、10日くらいで治った。いかに今の食べ物が病気を起こしているか感じた。

20年前からは有機農業と地場の食品産業の連携をはかっている。そこから、酒、醤油、大豆豆腐、無添加のソーセージ、乾麺、味噌、ラーメンなどが生まれた。一番特徴的なのは、食の安全の一連の事件の影響もあり、私たちの有機農産物を翌年も再生産できる値段で買ってくれる時代が来たことだろう。

もう1つ私が感動したのは、有機農業を始めて30年で村が動いたこと。ずっと逃げていた16歳年上の方が、「金子さんの方法と一緒にやらせてください」と言ってくれて、



金子美登さん

69名の先輩が転換した。

「今まで農家に生まれたことを悲しんでいたが、初めてやりがいがあった」と言ってくれた。30年ずっと村の人が見ていた結果だ。

田下 危機的な都市生活の中で情報だけがあふれていて、自分でいいものかどうかの判断をできない人がふえている。私が有機農業をやったと思うのは、まず自分の手で確かめられる、自分の味で確かめられること。その安心感こそが自分にとって一番大きい。

有機栽培の野菜は繊維が軟らかくて食べやすい。じゃがいもは煮えやすい。化学肥料をつかっているじゃがいもは角が立っている。そんなふうに分岐の感覚や感じ方を鍛えて観察することで、ああ、いいものを食べているんだ、自分の命は自分でつなげし、それがわかる人と接したい。それが私のこれからしていかなければならないこと。有機農業を理解していただくための道だと思う。



中島紀一さん

中島 西村さんは有機農業で作った野菜にはそれにふさわしい形があることを、全国各地を歩きながら実証しておられる。

西村 有機農産物の類型を区分した方がいいと思っている。有機JASで

は資材についての規制はあるが、品質については言及していない。本来は品質や栄養価が基準になるはずで、資材をドカドカ入れるメタボ有機野菜は本物じゃない。一例を挙げると、大根の葉は左右同じところから出る。ところがメタボになると、全体にズレてくる。畜産では高栄養・高たんぱくだったり窒素過剰だったりする飼料を使うと、家畜の糞が臭い。

包丁の切れ味に関わらず、有機農産物は切るときにはバリバリ音がする。そして硬い。それなのに火を通すとすぐに軟らかくなる。軟らかいにもかかわらず煮崩れしない。これがほんまもの。

メタボ野菜は切るときスカスカで、火が通らない味が染み込まない。炊いていくとしまい煮崩れしてドロドロになる。これは調理師の方がはっきりおっしゃっているし、私も実感している。有機はガス代の節約にもなる。

井村 私はがんばって耕作放棄地を耕してきた。雑草だらけで、土建屋さんが石を捨てていった状態の9haの土地を、就農後約10年間かけて耕して有機認証をとった。

3年前には、輪島の8haの耕作放棄地を耕して大農場を作った。農林水産省が山の中に作った50haの農地がほとんど耕作放棄地になっていたもので、金沢から往復4時間かかる。高齢化で過疎、耕す人がおらず、土もやせているという条件の悪い土地だが、大豆を2年作ったところ、本当にいい大豆がとれた。同じ場所で今年15haの新しい農地を開いている。

いま約38万haの耕作放棄地が日本にはある。その荒れている耕作放棄地を夢として耕していきたい。38万haの0.1%を私が生きている間に耕したい(拍手)。耕作放棄地を見るとムラムラする。旅先であっても見かけると耕したくなる。農民はもっと耕すべき。

福田 金子さんがおっしゃる通り、有機農業を進めることは地域の活性化になる。環境からすると土地の有効率を高め耕作放棄地を解消することは食の安定供給に寄与することで非常に素晴らしい。温暖化の観点では、農地はいまカーボンオフセットが可能ではといわれている。有機農業をやっている農地について、オフセットという形で国民運動がうまれていったら面白い取り組みになると思う。

中島 有機農業はさまざまな点から社会的にも期待視されているというお話だった。いま田下さんのところにもいろいろな方から就農についてのご相談があるということだが。

田下 新規就農したいという方の相談窓口をしているので、インターネット、知り合い、新規就農相談センターの直接紹介、新・農業人フェアなどを通して、就農希望者がたくさんやって来る。

生活をもっと自然なものにしたい、自分の食べるものは自給したいというような思いを持っている人が多い。以前からIT関係やコン



田下三枝子さん

コンピューターの前に座っているような方が多かったが、最近では、医療や技術関係の仕事の方も来るようになってきた。最近一番驚いたのは、弁護士を辞めて農業をしたいという人。うちの研修生は国立大学や大学院までご夫婦で出ているという方も多し。それまでの経歴の中で培った、パソコンの技術や数字の分析などを農業の中で生かすことで、農業も新しい世紀を迎えることができるから、ぜひ参入していただきたい。生活が出来るように私たちが支えたいし、就農者にも頑張ってもらいたい。国のサイドでも援助していただけると本当にありがたい。

西村 12月に京都大学を辞めて、新規就農者を受け入れる有機農業塾をはじめた。有機農業というのは夢のある仕事のようにだが、現実の農業を知らない方も多く、定着率は5%強程度ようだ。慣行の定着率は3%程度で、ほとんどが単なる夢に終わる。それだけ農業と今の社会の間が離れているわけだから、技術会議としては距離感を縮める仕事をやっていきたい。

金子 私のところで研修生した人は、中学生から退職前の人まで幅広い。1年お預かりして3つの卒業の仕方がある。

①自分の農地を手に入れてそこで独立、②一反だけ農地を買って独立、③家族の自給分だけ栽培
③は1日2時間か週に1回くらい働けばいい。これが一番なのでは。私たちは人の分を作り続けているから忙しいのだと思う。

最後に明日を語るという点から、エネルギー自給を挙げたい。94年から牛2頭の糞尿で5人用の家族の調理用のガスを作り、トラクターの燃料は廃食用油で対応、田んぼの草取りをするアイガモを狐や野犬から守る電柵は太陽電池、家にはソーラーパネルをつけ、給湯はウッドボイラーというように、身近な資源を使ってエネルギーを自給している。有機農業で安全な食を自給し、身近

な資源を使ったエネルギーの自給自足を柱にすれば、地球の資源のマイナス部分をプラスに変えられるように思っている。

中島 日本は資源のない国だと根拠なく教えられているが、今の金子さんのお話からすると、日本は本当に資源に恵まれている国で、その資源を上手く生かす暮らしのあり方ができていないことが問題ということではないか。

中地 消費者の立場からすると、これだけ素晴らしい有機農業を進めない手はないと思う。

他の職業から有機農業を始められる方も多いのことだったが、撮影の現場で一緒する20代30代の若いスタイリストやヘアメイクの人たちの中には、有機農業に興味を持っている人がたくさんいる。でもどうやって始めればいいのか、どこに行ったら体験できるのか、わからないので踏み出せないのが現状。厳しい現実があるにせよ、もっともっと身近に有機農業を知る機会があればいいと思うし、有機農業を進めていくことは今後の日本にとって大切なことだと実感した。



中地高子さん



各地で有機農業を広げていくさまざまな取り組みが行われています。4つの分科会では、それぞれの分野で活躍する話題提供者が現在取り組んでいること、今後の展望について語り、会場の参加者と交流しながら有機農業をさらに広げていくためにできることを考えました。

分科会報告

第1分科会

有機農業への参入促進 「私も有機農業で生きたい！」

新規参入、そして慣行からの転換参入で有機農業を始めたいという思いを形にするにはどうしたらいいのか、参入を希望する人たち、それを支援する人たちの話をうかがいつつ考えました。

●千葉孝志さん／消費者団体の要望を聞いて、有機への転換に取り組み、全面積を切り換えた。地域の田は水を循環させているため、地域全体で取り組んでいる。

●三浦秀雄さん／自然農法国際研究開発センター 慣行から有機農業への転換支援を行っている。農を基本にした自然循環型地域社会作りを目指している。

●室住圭一さん／10年前に有機農業で新規参入。有機農業は生産だけではなくそれをとりまくライフスタイルだと思っている。室住さんの新規参入5か条 1. 初年度から規模は大きくしない 2. 収入の不足は農家バイトなどで補う 3. 借金をしてまで設備投資しない 4. 周りに新規就農者がいたら積極的に交流する 5. 力がついてきたら少しずつ規模拡大をしていく

●工藤彰治さん／MOA 自然農法文化事業団 新規就農者の支援を行っている。有機農業に挑戦して何とか乗り越え定着している人を見ると、地域に仲間がたくさんいる人が多いことから仲間作りの大切さがわかる。

●進行／吉野隆子さん（有機農業技術会議）

環境問題、食の問題、農業の後継者問題……山積する課題を乗り越えるべく、学校給食を通じた有機農業の普及、環境再生について実践者を招き議論しました。

始めに提携米研究会事務局長 牧下圭貴さんより、学校給食法、食育基本法の現状と課題、有機農産物を取り入れた自校給食の教育性の高さ、地域との連携によって学校給食は子どもの生きる力をのばすと共に、地域を誇れる人材の育成にも貢献できるということを、愛媛県・今治市、高知県・南国市、東京都・日野市での事例を元にレポートしていただきました。

また、学校給食に携わる立場から海老原洋子さん（武蔵野市立境南小学校栄養士）、松永崇史さん（小学校に有機野菜を直送し交流をしている埼玉県・小川町の有機農業生産者）から、有機農産物を取り入れた学校給食の状況についてお話を伺いました。

30年以上続けられてきた活動が土台となり、これから全国で生産者、栄養士・調理師、教員、子ども達のつながり有機農産物による学校給食が展開されていくという希望を醸成できた分科会でした。

●進行／澤田史子さん

（西東京食育の会 ※話題提供も）

第3分科会

学校給食 「給食を有機農産物で！」

第2分科会

仲間づくり「若者の有機ネットワークを作ろう！」

つくるひと、売る人、食べる人、広める人… 学生から60代の方まで有機農業をさまざまな視点から考えとりくむ人々が集まりました。ラウンドテーブルでは全員の自己紹介の後、「有機農業第Ⅱ世紀」に若い世代がどのように日本社会に有機農業を根付かせ、有機農業で実現すべき社会とその価値観を表現していけばよいのかについてディスカッションしました。

有機農業の普及のために表現する際「かっこよさ」、「ブランディング」は必要性だが、その背景には有機農業を介した人と人、人と自然のつながりが重要であること、また、そのつながりをもとに生産者が継続して生産できるシステムづくりを発展させようというといった意見が交わされました。

この若者のネットワーク作りのためのラウンドテーブルをきっかけにメーリングリストが立ち上がり、各地域での有機農業に関する情報を共有し、相互に助け合い、元気づけるネットワークへと発展しました。

●スピーカー 就農者／田中裕之さん・西田洋平さん 学生／小口広太さん・永菅裕一さん JAS 有機認証機関／三好智子さん マスコミ／酒井卓爾さん 社会起業家／森さん 進行／吉濱晶子さん（国際青年環境 NGO A SEED JAPAN）

「有機農業生産者が安心して生産に従事できるようにしたい」「もっと多くの人々が有機農産物を食べられるようにしたい」その思いを流通・加工・外食産業…それぞれの立場からカタチにしてきた人々による報告、そして、「これから」を来場者とディスカッションを行いました。

オーガニックストア旬楽膳の代表取締役社長 牛田彰さんからは有機専門店の経営の難しさ、それでもなお、顧客が安心して購入できる品物を販売する店へのこだわりについてお話しいただきました。

株式会社フルーツバスケット代表取締役社長 加藤保明さんは生産者が再生産可能な価格を流通、消費者が保障する仕組みと顔の見える関係の重要性についてのご指摘がありました。また、企画外品も利用できる加工食品用の材料生産による、農家の経営安定事例などを報告いただきました。

株式会社すかいらーく 代表取締役社長兼最高経営責任者 横川寛さんからは、昨今の食糧事情、一般家庭の経済状況をふまえた、自給力の向上や食育の重要性についてのお話しがありました。

●進行／本田廣一さん（全国有機農業推進協議会理事・興農ファーム代表）

流通・加工・外食分野「もっと有機農産物を食べられるように！」

第4分科会